

# 教養論ノート

天野雅郎

## 一 ……について

冒頭から、いささか個人的な話で恐縮ではあるが、これまで私は「……について」という表題の文章を書いたことがない。幾つか理由はあるが、これでも長い間、大学で教員を続け、何かの拍子に「専門」を訊かれれば、不本意にも「哲学」と答えざるをえない立場であるから、よもや「哲学」(philosophy→philosophia)の起源が古代のギリシアで、いわゆる「ソクラテス以前の哲学者たち」と称される人々に始まり、その人々が「自然について(perí phuseōs)」という表題で、もっぱら本を書いたことを知らない訳ではない。(※)したがって、そもそも哲学者であれば「……について」と、このような形で自分自身の主題(テーマ)を形にしてみたい思いは、私にもある。強いて言えば、それが現段階では、実現していないだけの話である。

(※) 後世、このギリシア語の「……について」(perí)は、そのままラテン語(De)に置き換えられ、例えば以下の著作の表題となり、古代から中世へと、中世から近代へと引き継がれ、ヨーロッパの精神史を紡ぐ、強靱な縦糸となる。——アリストテレス『靈魂について』セネカ『寛容について』ルクレティウス『事物の本性について』アウグスティヌス『神の国について』ボエティウス『哲学の慰めについて』エリウゲナ『自然の区分について』トマス・アクイナス『存在者と本質について』コペルニクス『天球の回転について』ルター『キリスト者の自由について』ペーコン『学問の尊厳と進歩について』

また、私自身は「哲学」が、その起源からしてローマ的な、裏を返せばギリシア的ではない、いわゆる「科学」(science→scientia)とは異なる営みであり、その対象も方法も、違っていればこそその「哲学」である、という反科学的(unscientific)な、もしくは非科学的(nonscientific)な頭の持ち主であるから、よもや科学的な論文の読み書き(リテラシー)など、自然科学であれば、社会科学であれ、人文科学であれ、信憑しているはずはなく、したがって、例えば大学生に向かい、科学的な論文には「……について」という表題が似つかわしくなく、そのような表題の付け方をしているは科学的な論文の体を成さない、と言って、いっぱしの顔で説教を始める気など、さらさら起きないし、そのような役目を背負い込むのも、まっぴら御免である。

それでは、いったい何故、私が今回、このような「……について」という表題の文章を書こうと思いついたのか、と言えば、それは一つには、私が大学生の頃から敬愛して止まない、哲学者の三木清が、かつて『人生論ノート』(一九四一年)を書き、そこに「死について」から「個性について」まで、合わせて二十三本の、まさしく「……について」という表題の文章を収めているからであり、今回、その『人生論ノート』の響に倣い、私も「教養論ノート」という表題で、この「……について」という文章を幾つか連ね、願わくは、その連なりの中から近代日本の、ひいては現代日本の、いわゆる「教養」の辿ってきた道を辿り直し、それが今を生きる私たちと、どのように交差(クロス)するかが可能なのかを、考えるための糸口としたい。

そのために、今回は私が日本人の中の、少なくとも、この「日本人」という語が流布して以降の私たちの国で、いわゆる「教養」という視点で振り返らざるをえず、振り返らなくてはならない、幾人かの人物を選び出し、それらの人物と「教養」との関わりを跡付けることで、私たちの国の「教養」の成り立ちと、その人脈を俯瞰することができれば、と考えている。そこで、さしあたり思い付くのは大学生であった頃、恩師の口から折口信夫の「毎月帖」の一節を聞かされ、それが主たる原因となり、私が「……について」という表題の文章を書かなくなった、その際の記憶を呼び起こすことから、この稿を始めたい。今となつては、その記憶も定かではなく、臆気であるから、まず折口信夫の「毎月帖」の一節を確認することが先決である。(※)

(※) 以下、折口信夫からの引用は、原則的に旧版(新訂版)の『折口信夫全集』(全三十一巻、中央公論社)に拠るが、遺憾ながら、漢字表記については旧字体を改め、新字体に直した。なお、以下の一節は同全集の第三十巻(雑纂篇2)の中に拾遺として収められている。

今月分の「帝国文学」を見た。何々に就いて、と言ふ題目が、三つ迄あつたのには驚いた。此やうな煮えきらぬ事と言つてゐる間に、なぜ何々と、大胆に題をふらぬのであらう。中には可なりな創作を出した人の見出しさへ、さうであつたのである。「就いて」は、一部分を言はせて頂く、と言ふ風の余情を残す語である。誰がはじめて、かう言ふはやりを導いたのか知らぬが、漢学書生の何々之説・何々之記などの、後継ぎとも言ふべき不徹底な語である。明治以来のはやりであらうが、こんな題号のはやつてゐる間は、心の臓を備へた論文の、生れる氣遣ひがない。

事細かな詮索——例えば、この時の「帝国文学」(以下『帝国文学』)に、ど

のような表題の論文が名を連ねていたのかは、今は措く。また、その中で「可なりな創作を出した人」とは誰であつたのかも、今は措く。ここでは最初に、この「何々に就いて」という表題の文章が、当時の流行(「はやり」)であつたことを振り返っておけば、それで充分である。なお、これ以降も私は、いわゆる歴史学者ではないので、その不便を利点に置き換え、あえて事細かな事実の詮索には、深入りをしないことにする。もともと、そのような作業——いわゆる「重箱の隅を楊枝で穿る」ことや「つつく」ことが、はなはだ性に合わないことも事実であるが、それよりも何よりも、そのような作業に手間暇を掛けている余裕は、今の私には、ないからである。

ちなみに、折口信夫の「毎月帖」は、一九一八年(大正七年)の八月から十月まで、彼自身が編集し、発行した『土俗と伝説』の第一巻、第一号から第三号に連載されたものであり、前掲の文章は九月十五日の日付を宛がわれ、第三号の末尾近くに収められている。が、この月刊誌は結果的に、いわゆる「三号雑誌」とはならなかつたものの、この翌年の第四号で廃刊となつてしまふ。理由は幾つかあるが、折口信夫の「年譜」(全集第三十一巻)を繙くと、ただ簡潔に「編輯の勞に堪へられなかつたためである」と記されている。この年、折口信夫は三十三歳となり、それまでの中学校教員の時代から、ようやく母校の国学院大学に戻り、この年には臨時代理講師、次の年には専任講師、その次の年には、いよいよ教授の職に就くことになる。

なお、もともと国学院大学は、日本大学と並んで、その母胎になっているのは皇典研究所(※)であり、日本大学(当時の呼称は、日本法律学校)の方は、一八八九年(明治二十二年)に、国学院大学(当時の呼称は、国学院)の方は、その翌年に創設されているが、この両校が旧制の専門学校となるのは一九〇三年(明治三十六年)の「専門学校令」の公布以降のことであり、その翌年、日本大学も国学院大学も、揃つて専門学校となっている。ただし、国学院が国学

院大学と名を改めるのは、さらに、その二年後（一九〇六年）を待たなければならず、やがて、この両校が一九一八年（大正七年）の「大学令」の公布を受け、揃って旧制の大学に昇格を遂げるのは一九二〇年（大正九年）、折口信夫が国学院大学の専任講師となった年のことである。

（※）皇典講究所は、一八八二年（明治十五年）に有栖川宮職仁親王を総裁に、山田顯義を所長に、創設されている。文字通りに皇典、すなわち、皇国の典籍の講究を目的とする研究機関であるが、それは同時に、神職養成の教育機関でもあった。

例えば、この皇典講究所を中心にして編纂されたのが、全千巻の『古事類苑』であり、この膨大な百科全書の編纂は、一八七九年（明治十二年）に開始され、一九〇七年（明治四十年）に完成する。満年齢で言えば、ちょうど折口信夫が二十歳（はたち）となった年のことである。

## 二 戦争について

当時、このようにして「専門学校令」や「大学令」が公布され、それに伴い、私たちの国に多くの高等教育機関が増設され、端的に言えば、私たちの国に多くの専門学校生や大学生が量産された時代に、まさしく折口信夫の青年期は重なり合っている。そのことを、この「教養論ノート」の冒頭で、まず私たちは確認しておく。なお、折口信夫は後年（一九三六年）、母校である国学院大学のことを辞典（『世界文芸大辞典』）の項目として執筆しており、そこには「国学の伝統に立つて、民族的使命を明示し、其が主導力たる君民の深甚な感情を表現しようとするのが目的である。最初、明治中葉の欧化思潮に対する浄化運動の一つであつた。国史・国文の攷究によつて、民族の倫理学を確立しようと言ふにある」（全集第三十巻）と書かれている。

振り返れば、国学院大学が文字通りの国学の牙城を目指し、その名を国学院

大学と改める前年（一九〇五年）に、ちょうど折口信夫が同校に入学し、中学校時代の恩師でもある、三矢重松の「深い庇護」と「恩顧」を受けることとなるのは印象的である（「年譜」）。後年、右記の辞典の項目を執筆したのと同年、私たちの国の年号で言えば、昭和十一年、折口信夫は「三矢先生の学風」（全集第二十八巻）と題する講演も行なっているが、そこでも再度、彼の言う国学が「日本の過去の国民生活を尋ね」、そこに「古代の生活」と「生活の規範」を、そして、その時代に特有の「道德感」（「もらるせんす」）を発見する学問——と言ふよりも、その実践であることが力説されている。（※）当然、先刻の引用の「倫理学」も、その語義は同一である。

（※）三矢重松は、一八七二年（明治四年）に山形の鶴岡で生まれ、一九二四年（大正十三年）に五十三歳で亡くなっているが、彼も折口信夫と同様、折口信夫に先立って、国学院の創設の段階で、その門を叩き、第一期生となった後、同校の専門学校化と大学化と共に、その生涯を歩んだ人物である。折口信夫によると、その最大の功績は「日本文法」の構築と、語義本来の意味の「国文学」（『源氏物語』）の発見にあった。

なお、もともと日本語の国（くに）とは、それ自体が天（あま↓あめ）と向かい合う、自立（independence）と自律（autonomy）を旨とする場であって、それは天地（あめつち）の地（つち）とも繋がり合い、いわゆる地域や地方の精神史を、紡ぎ続けてきた語であった。（※）この点は、そもそも「教養」という語が英語の culture や、ドイツ語の Bildung の翻訳語として産み出された経緯とも結び付き、やがて私たちが「教養」とは何かを考える際の、試金石の一つともなるであろう。その意味において、もともと国学も国別に、それぞれの国（くに）に設けられた学校の謂いであり、それは国別の「生活」と、その「規範」や「道徳」や「倫理」に基づいた、いわゆる地方分権型の教育を施すべき

場であったことを、忘れてはなるまい。

(※) 白川静の『字訓』(一九八七年、平凡社)によると、そもそも「くに」は「一定の地域を、そこに営まれる生活と自然の山河とを含めていう」語であり、それは「一定の限られた地域の自然と、そこに住む社会集団の生活態とを合わせていう語である」。また、これと同様に「つち」も「土一般をさすのではなく、その地中にひそむ霊的なものをよぶ名で」あって、そのような「地霊」の宿る場、すなわち、文字通りの「聖所」という点では、例えば「ところ」という語とも結び付き、こちらも「神霊のおる、儀場となる地をいうのが原義である」。

ところで、この「教養」という日本語が、何時、誰によって、どのような形で使われ始めたのかは、よく分かっていない。が、その一応の目安として、これを一九一〇年代の出来事と捉えることには、それほど異論の余地は無いはずである。(※)したがって、それは私たちの国の年号で言えば、明治の末年から大正の前半に当たっており、厳密に跡付ければ、明治四十三年(一九一〇年)から大正八年(一九一九年)に当たるが、これに幾分の幅を持たせれば、それを一九〇四年(明治三十七年)の「日露戦争」の勃発の頃から、一九一八年(大正七年)の「第一次世界大戦」の終決の頃まで、と置き換えることも可能であり、そのように置き換えれば、この二つの「戦争」と重なり合う形で、私たちの国の「教養」は産声を上げたことになる。

(※) 日本語の「教養」の成り立ちについては、当面、以下の三冊が標準(スタンダード)となりうる。——筒井清忠『日本型「教養」の運命』(一九九五年、岩波書店) 竹内洋『学歴貴族の栄光と挫折』(一九九九年、中央公論新社) 荻部直『移りゆく「教養」』(二〇〇七年、NTT出版)

このような状況は、一見、現在の私たちとは無縁の、いかにも時代があった

状況であるかのように感じられるかも知れない。しかし、この時代を高等教育機関の増設、それどころか、その膨張(inflation)の時代として受け止めるならば、そこには現在の私たちと似通った、奇妙なまでに似通った、時代の相貌が浮かび上がってくる。今回、この一連の文章を書くに際し、私が最初に折口信夫を引き合いに出したのは、彼の暗、中、摸索の時期——すなわち、彼が大学生となり、やがて大学を卒業後、学問と創作と、ひいては就職の間で揺れ動き、その苦渋の果て、大学教員への道を歩き始める時期と、ちょうど私たちの国で「教養」が姿を現し、定着を見るに至った時期が重なり合っている点に、あらためて注意を喚起しておきたかったからである。

その点、例えば私たちの国で長い間、いわゆる教養書の典型(モデル)と目されてきた、阿部次郎の『三太郎の日記』が出版されるのが、一九一四年(大正三年)から一九一八年(大正七年)であったことを振り返るだけでも、この当時の「教養」ブームや「教養」熱(フィーヴァー)は疑いようがない。そして、それは私たちの国の近代化(modernization)が、ちょうど明治から大正への「改元」を経ることで、そこに歴然とした落差を産み出し、その落差の前で、人々が右往左往を始める時期とも重なり合っている。言い換えれば、それは文明化(civilization)という号令の下、私たちが都市(city)に群がり、そこで市民(citizen)として生きていくことを選び取った時代の、幸福と不幸が隣り合わせになったような事態である。

ちなみに、阿部次郎の『三太郎の日記』が出版されるのは、お気付きの通りに「第一次世界大戦」の真直中である。——とは言っても、その戦争が当時、そのまま「第一次世界大戦」の名を冠せられていたはずはなく、また、その戦争を私たちの国が、文字通りの世界戦争(World War)として受け止める感受性を備えていたはずもなく、この戦争が当時の日本人の多くにとっては、もっぱら大陸侵略の契機として捉えられ、あるいは、いわゆる大戦景気の引き金とし

て捉えられていたであろうことは、想像に難くない。なお、阿部次郎は折口信夫の四歳年長で、一八八三年（明治十六年）に山形で生まれているが、この年には東京に「鹿鳴館」が完成し、私たちの国が極端な、皮相な欧化主義に向かい、全力疾走を始めようとしている頃である。（※）

（※）「鹿鳴館」の位置付けについては、さしあたり磯田光一の『鹿鳴館の系譜』（一九八三年、文藝春秋）の中から、以下の一節を引用すれば充分である。「鹿鳴館がどう批判されようと、それは生れたばかりの近代国家がやむなく試みなければならなかった化粧であった。悲哀をこらえて、無理な背伸びをしようとする健気な志なしに、あのような建物が東京に建てられるはずはなかった。いまの私の目には、鹿鳴館の舞踏会の華やかさのうしろにあった悲哀は、きわめてアジア的な悲哀にみえる。その悲哀を共有することなしに、近代日本を語ることができるであろうか。狭義の鹿鳴館の時代は終っても、外来文化との接触の生んだドラマは終りはしなかった」。（訳語「文学」の誕生——西と東の交点）

### 三 自殺について

さて、ここで再度、折口信夫の「年譜」に立ち返り、彼が『土俗と伝説』を創刊し、それが致し方なく、廃刊せざるをえない事態に陥る年（一九一八年）のことを跡付けておくと、まず目に付くのは、彼の母親の逝去の記事（「母こう永眠」）である。この母親と、折口信夫の確執——俗に言う、愛憎相半ばする関係については、後年（一九四八年）の「わが子・わが母」（全集第二十八巻）に語られている「執意」（「静かに此母からあとを消す為に家に後あらせぬ以外にない」）を引くに留めるが、その母親の逝去が「年譜」の上では、はなはだ無味乾燥に扱われ、その後に続く『万葉集』の東歌や、とりわけ『源氏物語』の桐壺の巻への言及すら、これを暗示として深読みするのは行き過ぎではなからう

か、と躊躇せざるをえないほどである。（※）

（※）「年譜」には、彼の母親の逝去の記事に続いて、以下の一文が置かれている。「この月から、ロシア人ニコライ（・）ネフスキイのために「萬葉集」東歌・「源氏物語」桐壺の巻を講じ、四月下旬に及ぶ」。

折口信夫の父親（秀太郎）の方は、すでに一九〇二年（明治三十五年）に心臟麻痺で急逝しているが、その際の「年譜」を繙くと、そこには「この月の文学会に、中学生の懦弱を戒めて「変生男子」の論題で演説。この頃から学業成績著しく下る」という一文が置かれ、いわゆる思春期の微妙な陰影について、それなりの含みを感じられるのは好対照である。また、この年の暮れから翌年に掛けて、折口信夫が二度に及ぶ自殺未遂を繰り返しているのも、その影響と受け取れないことはない。なお、右記の文中の「文学会」とは、折口信夫が当時、通っていた中学校（大阪府第五中学校）の「文学会」の謂いであり、この中学校は彼が卒業する前年、すなわち、この年の前年に、その名を府立天王寺中学校と改めている。現在の、府立天王寺高校である。

ところで、自殺未遂と言えば、この翌年（一九〇三年）の五月二十二日、藤村操が日光の華厳滝に投身自殺をしたことは、よく知られており、この事件が当時の若者の間に、はなはだ大きな波紋を投げ掛けたことも、よく知られている。（※）実際、この「死の報知を聞いて、ある黙会を感じた」と、かなり意味深長な発言を折口信夫はしており、この事件の直前、彼が二度に及ぶ自殺未遂を繰り返した際の状況も含めて、この間の事情を「零時日記」（全集第二十八巻）という形で、一九一四年（大正三年）の『中外日報』に連載している。この時、すでに折口信夫は数えの二十八歳であり、自殺未遂の頃からは十二支で一回りを数えることになるが、当時の若者の心情と、その傾向を知る上では貴重な証言の一つであろうから、この場に引いておく。

(※) 藤村操の自殺後、彼の「遺書と死は文学青年や哲学青年に多大な影響を与え、この文に感動した若者が次々と華嚴の滝に身を投げて自殺、六月十八日から十一月十四日までの間に十一名の自殺者と十五名の自殺未遂者が保護された」(稲葉真弓・下川耿史『自殺者たち』一九九四年、青弓社)。もちろん、この「遺書」が彼の、いわゆる「人生不可解」の流行語ともなった「巖頭之感」であり、この事件を引き金にして、華嚴滝は文字通りの「自殺の名所」となる。結果的に、彼死から四年間で、この華嚴滝に身を投げた若者の数は計百八十五人に上り、その内の四十人が、どうやら既遂であつたらしい。

それは十六の年の冬から、翌年の春にかけての出来事である。今も其時の事を思ふと、山蔭にわづかばかり残つた雪の色が、胸に沁む。さういふ谷あひの道をば、齒をがちがちさせながら、一心に登つて行つた若い姿を、まざまざと目に浮べることが出来る。暮の二十六日頃と、三月の月はじめのことであつた。薄日の影のおとろへた麓の村の、むつまじげな家々の人声を聞きながら、頂垂れて二里にあまる停車場への道を急いだ後数月、突如として藤村操の死の報知を聞いて、ある黙会を感じた。

どのような経緯で、この「零時日記」が『中外日報』に連載されるに至つたのかは、今は措く。『中外日報』は、一八九七年(明治三十年)に真溪涙骨が京都で発行した新聞(当時の呼称は『教学報知』)で、その名の通りの宗教新聞、と言うよりも、宗教改革(reformation)新聞であるが、当時、このような改革運動が私たちの国で、一種の若者運動の形を取り、広く巻き起こつていたことは見逃されてはならず、言い換えれば、そのような改革運動や若者運動の渦の中に、折口信夫も藤村操も巻き込まれていればこそ、この二人の間の「黙会」も成り立つたはずである。(※)なお、この新聞が『中外日報』と名を改めるの

は、一九〇二年(明治三十五年)であり、それは折口信夫の父親の逝去に始まり、彼の自殺未遂に終わった年の出来事である。

(※) 真溪涙骨は一八六九年(明治二年)、福井の敦賀で生まれ、この『中外日報』の社主を没年(一九五六年)に至るまで務め、私たちの国の宗教ジャーナリズムの礎を築いた人物の一人として知られているが、この当時、このような宗教ジャーナリズムの代表格として挙げるべきは、後述の『中央公論』を別にすれば、やはり清沢満之や暁鳥敏が一九〇一年(明治三十四年)に創刊した、雑誌の『精神界』であろう。清沢満之の方は、生年が一八六三年(文久三年)で、没年が一九〇三年(明治三十六年)であるから、いささか年長ではあるが、暁鳥敏の方の生年は一八七七年(明治十年)、没年は一九五四年(昭和二十九年)であり、彼が亡くなるのは、折口信夫の没年(一九五三年)の一年後である。

ちなみに、藤村操は折口信夫の一歳年長で、一八八六年(明治十九年)に北海道で生まれているから、享年は数えの十八歳、満年齢に直せば、いまだ十七歳にも達していない頃であるが、当時の彼は第一高等学校、すなわち、その卒業生の多くが帝国大学(当時の呼称は、東京帝国大学)へと進学し、私たちの国の近代化と文明化と、何よりも帝国化の牽引車(トラクター)となるべく、いわゆるエリート(élite)教育を施された、文字通りの選良であつた。なお、この第一高等学校は彼が、ちょうど生まれた年に創設され、一八九四年(明治二十七年)の「高等学校令」の公布に伴い、その名を第一高等中学校から第一高等学校へと改めているが、その後身は現在、東京大学の教養学部となり、その一部は、千葉大学の医学部と薬学部となっている。

ところで、このようにして藤村操が自殺を遂げ、折口信夫は自殺を遂げるこゝとが叶わなかった年、折口自身の「零時日記」の言い回しを借りれば、あくまで「機縁の熟せなかつた為に、偶然に死の面前から踵を旋し」、 「不随意の障礙

が、不随意の死からすくひあげ、「竟に死といふものを掴むことが出来なかつた」年——この一九〇三年（明治三十六年）は単に、この二人の若者の生と死を分け隔てた年である、と言うだけでなく、さらに多くの若者の生と死を、それどころか、実に多くの日本人の生と死を、分け隔てた年でもあったことが想い起こされて然るべきである。（※）そして、それは私たちの目の前に、やがて「教養」という二文字が姿を見せる、その際のギリギリの局面であり、いわゆる限界状況（Grenzsituation）に他ならなかった。

（※）モリス・パンゲの『自死の日本史』（一九八六年、筑摩書房）によると、この年は私たちの国で、いわゆる「自殺死亡率」の統計が取り始められて以来、すなわち、一八八二年（明治十五年）以来、その「自殺曲線」が上昇を続け、その数値が「もっとも高い水準に達した年」であり、それは「人口十万人に対して年間自殺者数は二十人を越える」事態を迎えた年である。

#### 四 影響について

モリス・パンゲの『自死の日本史』を引き合いに出した、そのついでに、言つては語弊があるが、もう少し、この卓抜な「日本文化」論——すなわち、この「日本教養」論について、付け足しておきたい点がある。（※）それは何よりも、この著書の冒頭（「日本版への序」）で、モリス・パンゲが「人間の行為を描き、理解し、分析し、評価するには比較と対照によるほかないというのが、わたしの考えである」と述べている通り、このようにして私たちの国に自殺者が急増し、多くの日本人が自殺の淵へと誘われ、ある者は既遂の側に、ある者は未遂の側に、振り分けられた頃、要するに、十九世紀の末年から二十世紀の初年には、まったく同様の事態がヨーロッパでも出現し、この時代を特徴づける「社会的事実」として理解されていたことである。

（※）モリス・パンゲの『自死の日本史』は、もともと一九八四年にフランスで出版されており、その原題（La mort volontaire au Japon）は『日本における意志的な死』であるが、この「意志的な死」が「自殺」（suicide）とは異なる、はなはだ日本的な性格を兼ね備えたもの（「自死」）でありながら、それが決して日本人に固有の、独自のものではなく、むしろ人類に共通の、その名の通りの「人間の条件」であることを、モリス・パンゲは力説している。そして、それが本書を一流の、まさしく教養書たらしめている点でもある。

このような「社会的事実」に則って、例えばエミール・デュルケームの『自殺論』（二八九七年）が書き上げられ、そこから「社会学」（sociologie）が築き上げられていったことは、よく知られているし、このような「集合表象」の代表には、その言い回しとは裏腹に、例えば「個人主義」や「利己主義」や、あるいは「ニヒリズム」という語によって一世を風靡した、この時代の頹廢的な、虚無的な雰囲気、指摘することが可能である。言い換えれば、このような「世紀末」から「ベル・エポック」へと至る、その名の通りのヨーロッパ的な画期（エポック）は、それ自身が同時に、非ヨーロッパ的な世界や反ヨーロッパ的な世界とも通底する、文字通りの球状の、グローバル（global）な現象を産み出した時期でもあったことになる。

その関連で、ここに前掲のニコライ・ネフスキーのことを想い起こしておく、彼は折口信夫の五歳年少で、一八九二年（明治二十五年）にロシアで生まれ、ペテルブルグ大学を卒業後、一九一五年（大正四年）に国費——要するに、ロシア帝国費の留学生として日本の土を踏んでいるが、その二年後（一九一七年）には「ロシア革命」が勃発し、帰国を果たせないまま、十五年に亘って日本への滞留を余儀なくされることになる。（※）したがって、折口信夫がニコライ・ネフスキーと出会い、この「日本人の細かい感情の隅まで知つた異人」（全

集第二卷「若水の話」と親交を結ぶようになったのも、ふたたび「第一次世界大戦」の渦中であり、このような国際関係や文化交流の中から、その輪郭を刻み出したのが「民俗学」でもあった。

(※) ニコライ・ネフスキー (Nikolai Aleksandrovich Nevsky) が最初に日本の土を踏んだのは、一九一三年(大正二年)の大学生の頃、夏休みを利用して二箇月間の来日を果たした時である。以降、彼は小樽商科大学(当時の呼称は、小樽高等商業学校)と大阪外国語大学(当時の呼称は、大阪外国語学校)で、それぞれロシア語の教師として生計を立て、日本人女性(萬谷イソ)と結婚し、一人娘(ネリ)を儲けたが、一九二九年(昭和四年)に祖国(当時の呼称は、ソヴィエト連邦共和国)に帰り、母校(当時の呼称は、レニングラード大学)の教授となった後、日本の密偵(スパイ)の嫌疑を掛けられ、いわゆる「肅正」の犠牲者となり、一九三七年(昭和十二年)に妻と共に銃殺されている。

ここで折口信夫の使っている「異人」という語が、いわゆる外国人の謂いであることは、言を俟たない。が、そのような通常一般の、ありきたりの意味によつては推し量れない何か——俗に言う、余韻や陰影(ニュアンス)を、その物言いの底に感じ取らせてしまふのが、多分、折口信夫の魅力の最たるものであることも、言を俟たない。事実、この「異人」という語の表記を改め、幾分の変奏曲(variation)を奏でれば、たやすく夷人や偉人や威神が、その姿を現すのは必定であり、そこに例えば、英語のストレンジャー(stranger)を重ね合せると、いわゆる「折口名彙」の代表とされる「まれびと」との距離すら、もはや五十歩百歩であると言わざるをえない。その「まれびと」を、折口信夫が遙かな、遠い海彼の客人と捉えていた点も含めて……。

事実、この「異人」との親交が機縁となり、ニコライ・ネフスキーは折口信夫の主宰する『土俗と伝説』に三本の論文(「農業に関する血液の土俗」「遠野

のまじなひ人形」「相模の獅子舞ひの歌」)を寄稿している。そのような経緯から判断しても、この『土俗と伝説』が折口信夫にとって、やがて「三号雑誌」に近い形で廃刊の憂き目を見ることになろうとは、まったく予想外の出来事であったに違いない。その意味において、この雑誌の廃刊の原因を探し求めるとすれば、むしろ私たちが配慮しなくてはならないのは、この年の秋以降に吹き荒れた「はやりかぜ」であろう。この件については、例えば『土俗と伝説』の第四号、要するに、この雑誌の最終号の「記者より」(全集第三十卷)の一文に詳しい。無論、その「記者」とは他ならぬ、折口自身である。

この雑誌四号即、当月号は、実は十一月に出すべき筈であつた。処が例のは、やりかぜの為に、編輯人助手残らず将棋仆しに、替り番に牀に就いたので、思ふ様に編輯が出来ず、とうとう一月遅らして了つた。殊に毎月帖・民譚辞典・抜き読みの担当者は、可なりひどいのに罹つて、弱つてゐた。何が、人ずくなの上に、もう来月号も、殆同時に、活版屋の方へ廻さねばならなくなつてゐる。其為に、遅れて出来た。右の三つの欄の原稿は、正月に出る第五号に廻すことにした。尚、今余りおし詰つたからとの、板元の意見で、四号を一月号とした。(傍点・引用者)

この一文から推し測る限り、折口信夫が『土俗と伝説』の廃刊を、この時点で想定していた節は見受けられず、むしろ「はやりかぜ」(influenza)の災禍と、その影響(influence)で、この雑誌の刊行を遅延せざるをえなくなった事情が説明されており、それが遠因となり、この雑誌の「自然廃刊」(「年譜」)に繋がったと考えるのが妥当なようである。(※)それと云うのも、この『土俗と伝説』は折口信夫にとって、そもそも柳田國男が一九一三年(大正二年)に創刊し、その四年後の第四卷、第十二号で休刊となっていた『郷土研究』の後を



継ぎ、その「復興の意気込み」（『年譜』）で刊行を開始した雑誌であり、折口自身の述懐を俟つまでもなく、その「意気込み」には尋常ならざるものがあつたことを、私たちは想い起こす必要があるからである。

（※）この「はやりかぜ」は、この年から次の年に掛け、世界中に流行した感冒（インフルエンザ）で、全世界で六億人が感染し、その内の二千五百万人が死去するに至つたと推定されている。特に、この感冒が猛威を振るつたのは「第一次世界大戦」下のヨーロッパであり、そのために「スペイン風邪」の名を与えられることにもなれば、この「はやりかぜ」の影響で、その「世界戦争」自体が休戦せざるをえない状況に陥つたことは、よく知られている。私たちの国でも、合わせて二千四百万人に近い患者と、四十万人に近い死者を出し、その中には、例えば島村抱月と松井須磨子の悲劇も含まれていた。

## 五 広間（サロン）について

柳田國男の主宰した『郷土研究』は、もともと一九〇七年（明治四十年）から、その翌年の頃、彼の自宅で始められた「郷土研究会」が、その三年後（一九一〇年）には新渡戸稲造邸に場を移し、その名を「郷土会」と改めた後、その「郷土会」を母胎にして、四年間に亘って刊行された雑誌であり、いわゆる民俗学の雑誌としては、私たちの国で最初の雑誌とされている。当初、この雑誌の編集には高木敏雄が名を連ね、柳田國男との共同編集という形を取っていたが、やがて一年後には高木敏雄が去り、それ以降は柳田國男が単独で、この雑誌の編集に当たることになる。（※）ちなみに、このようにして『郷土研究』が柳田國男の単独編集となつた、その同じ年（一九一四年）に、はじめて折口信夫は柳田國男の前に姿を現すことになる。

（※）高木敏雄は、一八七六年（明治九年）に熊本で生まれているから、年齢的には、

柳田國男の一歳年少である。もともと彼が、東京帝国大学でドイツ文学を専攻した後、柳田國男と出会い、その出会いが結果的に、別れという形を取らざるをえなくなるのは、私たちの国の民俗学が民俗学として成立する段階で、抱え込まざるをえなかった葛藤の一つであり、その典型でもあつたらう。当時、高木敏雄は東京高等師範学校（後の東京教育大学）の教員であつたが、その職を一九一六年（大正五年）に辞した後、やがて一九二二年（大正十一年）、新設されたばかりの大阪外国語学校（後の大阪外国語大学）の教授に就任し、その翌年、ドイツ留学を目前に控えて、四十七歳の若さで急逝することになる。なお、彼が東京帝国大学を卒業後、直ちに赴任した第五高等学校（後の熊本大学）で、その教えを受けたのが松村武雄であり、彼によって、やがて私たちの国の近代的な神話学は確立されることになる。また、高木敏雄と折口信夫の関連で言えば、折口信夫が中学生の頃（一八九九年）、数えの十三歳でありながら、高木敏雄の論文（『白鳥処女伝説』）を読んだのが、どうやら「古代研究に関する論文の読み初め」でもあつたようである（『年譜』）。ちなみに、松村武雄は一八八三年（明治十六年）に熊本で生まれているから、折口信夫の四歳年長である。

ところで、この時期——すなわち、私たちの国の「元号」が明治から大正へと切り替わる頃、より大きな遠近法（パースペクティブ）を用いれば、私たちの国が二十世紀を迎え、この新世紀の到来と共に、それと軌を一にするかのようにして、私たちの国に「会」という名の集まりが、次々と産声を上げていることは注目されて然るべきであり、また、そのような「会」の担い手たちが、その多くは二十歳代の、逆算すれば、明治の初年に生まれた若者たちであつたことも注目されて然るべきである。例えば、柳田國男も一九〇二年（明治三十五年）の「文学会」や「清話会」を皮切りに、その翌年の「土曜会」、翌々年の「竜土会」（当時の呼称は、凡骨会）と、このような「会」を次々と打ち立て、

その会合の場に、自宅まで提供している。

もちろん、このような会合の場に自宅を提供することができたのは、単純な理由として、柳田國男が当時、法制局参事官を務めていたからに他ならない。私たちは、一般に柳田國男と言えば民俗学者というレッテルを貼ることに慣れがちであるが、もともと彼は一九〇〇年(明治三十三年)、東京帝国大学を卒業後、農商務省の農務局に入った官吏であり、以降、法制局参事官から貴族院書記官長を経て、この職を辞さざるをえなくなる一九一九年(大正八年)に至るまで、約二十年間を官界で過ごした人物であったことが、忘れられてはならない。言い換えれば、それは柳田國男が数えの二十六歳から、四十五歳に至るまでの時期に当たっており、一人の人間の人生に即して言えば、そこには壮年期の大半が含まれることになる。

そのような、いわゆる働き盛り、に、柳田國男は官吏としての職務を遂行する傍ら、自宅の広間(salon)を提供し、文字通りのサロンを形成する動きを見せている。当然、その自宅は彼が大学を卒業し、松岡國男から柳田國男へと、その姓を改め、柳田家の養嗣子となって以降の——明け透けに言えば、いわゆる新婚家庭でもあったから、そのような状況が必然的に、この会合の場を彼の自宅から遠のかせ始めるのは時間の問題であつたらう。実際、この会合の場は柳田國男が一九〇四年(明治三十七年)に養父(柳田直平)の四女(孝)と結婚した頃から、次第に彼の自宅を離れ、例えばフランス料理店(竜土軒)や料亭へと、その場を移し、端的に言えば、そのような出費と贅沢を可能なものとする、大人たちの社交の場へと姿を変えていく。

柳田國男に即して言えば、それは彼が一九〇九年(明治四十二年)に『後狩詞記』を自家出版し、その翌年には『石神問答』と『遠野物語』を刊行するに及んで、いわゆる民俗学者となっていく過程に他ならない。そして、そこには年齢的にも、ちょうど彼の三十歳(而立)代が当たっており、彼が新婚家庭を

開催場所として始めた「郷土研究会」が、その会合の場を新渡戸稲造邸へと移し、その名も「郷土会」と改め、そこから『郷土研究』が刊行される時期とも重なり合っている。その点で言えば、ちょうど『石神問答』と『遠野物語』が刊行されるのは、この「郷土会」の発足の同年であり、柳田國男の年齢で言えば、彼が三十歳代の前半から後半へと齡を重ね、もはや青春の日々の喧騒とも距離を置かざるをえなくなる頃である。

なお、この「郷土会」が新渡戸稲造邸を開催場所としたのは、もともと柳田國男の「郷土研究会」自体が、新渡戸稲造の影響——具体的に言えば、一九〇七年(明治四十年)に新渡戸稲造が「報徳会」の例会で行なった講演に感銘を受け、柳田國男が始めた会であつたからである。(※)ちなみに、その際の講演は「地方(ぢかた)の研究」と題されており、この「地方の研究」が姿を変え、その呼び名を改めたのが、いわゆる「民俗学」であつたことは注意されて然るべきであるが、より注意されて然るべきなのは、その「民俗学」という呼称は一つの、あくまで選、択、肢であつて、そこには「人類学」や「土俗学」を始めとして、このような「地方学」や「郷土学」が、まさしく渾然一体となつていた時期が存在していたことは、忘れられてはならない。

(※) この「報徳会」は、もともと二宮尊徳の報徳思想に端を発し、その点で遡れば、現在まで存続する「報徳社」とも起源は同一であるが、この「報徳会」の場合は一九〇五年(明治三十八年)、二宮尊徳の没後五十年を機に、当時の文部省と内務省の官僚——例えば、岡田良平(後の京都帝国大学総長、文部大臣)と一木喜徳郎(後の文部大臣、内務大臣、宮内大臣、枢密院議長)の兄弟が、その中心となつて設立した団体であり、このような講演会を開催したり、機関誌(『斯民』)を発行したりすることにより、国民の統合と教化を図るのを狙いとしていた。そして、その象徴(シンボル)が、やがて当時の小学校の校庭に据えられる「二宮金次郎」(正確には金治郎)の像である。なお、この「報徳会」は明治から大正

への改元の年（一九二二年）に、その名を「中央報徳会」と改め、そのまま「第二次世界大戦」の終結時まで存続することになる。

その脈絡で言えば、どうやら柳田國男と折口信夫が直接、最初に顔を合わせるのは、一九一五年（大正四年）の「郷土会」の席らしく、その翌年には折口信夫が国学院大学に、一卒業生の身でありながら、彼自身の「郷土研究会」を設立することになるし、その延長線上で、彼の主宰する『土俗と伝説』も刊行されることになる。その点で振り返れば、折口信夫も柳田國男と同様、この時期においては確実に、いわゆる「民俗学」に代わる選択肢として、彼なりの「郷土学」や「土俗学」や、あるいは「民族学」（「えすのろじい」）を考えていたことが想い起こされてよい。そして、そうであるからこそ折口信夫は、その『土俗と伝説』の「創刊に当りて」で、このような「末流跋扈の時代」（全集第三十巻）を嘆くことにもなったはずである。

## 六 記憶について

ところで、このようにして「民俗学」が、いまだ「民俗学以前」（※）の段階にあり、そこには「さまざまな民俗学が、いや、のちに民俗学と名づけられることになる知の運動が存在した」時代——言い換えれば「いまだ名づけられない民俗学」が「生々しい闘いの現場であった」時代、そのような時代の中では柳田國男とは言え、折口信夫とは言え、共に「たくさんの志と欲望を抱えた若い知の探究者たち」の一人であったことに変わりはなく、そのような彼らが「未知なる領域に、素手同然で果敢に踏み込んでゆく戦士」となり、その結果、たまたま彼らが「革命の人」となり、この「時代を生き抜いた思想家」となりえたことは、例えば『土俗と伝説』の「創刊に当りて」から、折口信夫の次の一

文を引くことも明らかとなろう。

（※）以下、引用は赤坂憲雄『柳田國男の読み方——もうひとつの民俗学は可能か』（一九九四年、筑摩書房）の序章（「民俗学以前」）による。なお、同じ著者による柳田國男論（『柳田國男の発生』）としては、以下の「三部作」が参考になる。『山の精神史』（一九九一年、小学館）『漂泊の精神史』（一九九四年、同上）『海の精神史』（二〇〇〇年、同上）

旧の「郷土研究」既に、在来の神学者や、科学の金看板に憧るる年代記学者の反抗心を咬り候模様見え居り候。此は研究・表現の態度に就きての没理会に基き候ことに御座候。本誌の代になりても、復其再燃有之べきは覚悟の前に候。時によりては、逆へ火鑽くることもあるべきかと存じ候。ともあれ、家・土・民を対象とせる新日本学建設の為には、我ら何を犠牲に致すとも悔い申すまじく、或時は天の一方のおどろしき声とも響き比べむこと、予て期し居り候。（傍点・引用者）

事実、折口信夫が幾つもの「変名」を操り、この『土俗と伝説』の筆を執ったことは「年譜」にも記されており、そのような三面六臂の、あるいは八面六臂の無理や無謀を犯してまで、この雑誌を刊行しなくてはならない理由が彼にはあった——少なくとも、この時の彼にはあった、と言えるであろう。もちろん、その理由の最たるものは、これに先立つ五年前（一九一三年）、柳田國男の主宰する『郷土研究』への投稿原稿（「三郷巷談」）を通じて、はじめて折口信夫が柳田國男の前に姿を現し、それは彼が「柳田國男の知遇を得、自ら師と憑むやうになつた」（同上）始まりでもあったからに他なるまい。が、それと並んで興味深いのは、この『郷土研究』という媒体（メディア）を通じて、逆に露とならざるをなかつた、この二人の確執である。（※）

(※) 折口信夫と柳田國男の確執については、池田彌三郎『私説 折口信夫』(一九七二年、中央公論社)と、同じ著者の谷川健一との対談『柳田國男と折口信夫』(一九八〇年、思索社)が詳しい。なお、折口信夫と柳田國男の両者の名を連ね、表題に掲げた論考として、今回は以下の論考を参照したので、列記しておく。谷川健一著作集3『柳田学と折口学』(一九八三年、三一書房) 西村亨「柳田國男と折口信夫」(『折口名彙と折口学』所収、一九八五年、桜楓社) 梶木剛「柳田学と折口学」(慶応義塾大学国文学研究会編『折口学と古代学』所収、一九八九年、桜楓社) 赤坂憲雄「柳田と折口」(『岩波講座・日本通史・第18巻』所収、一九九四年、岩波書店)

この確執は、そもそも折口信夫の投稿原稿(『髻籠の話』)に、柳田國男が筆を入れ、修正を加えたことや、その文体(スタイル)を、文語体(そ、う、ら、ふ)から口語体(で、あ、る)に改め、なおかつ、その掲載を翌年(一九一五年)の時点にまで引き延ばしたことに、端を発するであろうが、おそらく、そのような部分的で表層的な対立——要するに、この両者の趣味や趣向や、お互いの美意識の差異から生じる対立以上に、むしろ全体的で深層的な対立が、この二人の間には出会いの時から、すでに埋めようのない溝を懐胎していた点が見逃されてはならない。そして、その溝を埋めようとしたせいなのか、それとも埋めようとはしなかったせいなのか、折口信夫も意識的な、あるいは無意識的な、一種の「記憶の錯乱」(池田彌三郎)へと陥っている。

例えば、折口信夫が柳田國男の『遠野物語』を最初に読んだのは、彼の「年譜」に従えば一九一四年(大正三年)——すなわち、彼が「髻籠の話」を書き、これを『郷土研究』に投稿したのと、まったく同じ年の出来事であり、そこには「冬の日、神田の露店で柳田國男著『遠野物語』を宛め、深い感動を受け」る」という一文が置かれ、この劇的(dramatic)な出会いが折口信夫にとり、

どれほど重要な体験であったのかが窺われうる。実際、それから二十年以上の歳月が過ぎても、この「名著」は「柳田先生のお書きになった、我々に民俗学的興奮を与えてくれた最初の書物」(『山のはなし』全集第十五巻) 同上)であり、また「先生の最記念すべき書物」(『遠野物語』後記)全集第三十巻)であることを、折口信夫は繰り返し、その口の上せている。

しかも、それは「大正の三とせの冬の(改行)凧のふく日なりけむ——」という書き出しで始まる、彼の『古代感愛集』(全集第二十三巻)の中の詩(『遠野物語』)を通じて、ほとんど動かしようのない事実、と言うよりも、むしろ真実にまで昇華を遂げることになる。そして、その詩の中で折口信夫は、たまたま東京の神田の露店の軒先で、彼が『遠野物語』の「古書」を見付け、それを夕闇の差し迫る頃、さながら「狂しき人」のように「五銭」で買い、逃げるように部屋へと持ち帰り、机に伏しては何度も、何度も嘆息しつつ、この「我が憑む師のつくり書」を読み、そのページの上に「涙」を垂らした体験を告白し、この『遠野物語』が彼にとって、文字通りの「これの世の珍宝(改行)我が為の道別きのふみ」であったことを強調して止まない。

ところが、その一方で折口信夫には、柳田國男の『遠野物語』との出会いが実は、彼の「専門学校を出る頃」——要するに、彼が国学院大学を卒業する直前の、一九一〇年(明治四十三年)の段階で生じ、すでに彼は刊行されたばかりの『石神問答』と『遠野物語』を「手に入れ」、そこから「初めてこれらの暗示に富んだ、其でゐて、まだ暗示の具体化せられきつてゐなかつた当時の学風にふれ」た体験を、告白する発言も遺されている。(※)「ともかくも何か私どもの待ち望んでゐた学問に行きあつたといふ気が強く心に來ました。国文学でも史学でもないが、まるきり違つてゐるものでもない、かう言ふ学問が、はじめて我々の前に現れて來た。それは、明らかに、大きな驚きでした。何しろ文科系統の学問に大きな改革が起る前ぶれだったのですもの」。

(\*) この告白は「先生の学問」(全集第十六巻)と題され、一九四七年(昭和二十二年)に行なわれた講演の中の発言であり、すでに最初の『遠野物語』との出会いから、三十年以上の歳月を経たものではあるが、そこに折口信夫の密かな、もう一つの「詩と真実」が物語られていることは確かであろう。ちなみに、彼の『古代感愛集』が刊行されるのも、ちょうど同じ年のことである。

このような折口信夫の感慨を、一口に「記憶の錯乱」や、その誤認や隠蔽の行為として捉える狭量を、残念ながら、私は持ち合わせていない。むしろ、折口信夫が幼少年期の頃から桁外れの、見様によつては、尋常ならざる記憶力の持ち主であったことを踏まえれば、彼が何故、このような「歌虚言」(池田彌三郎)を、自分自身と柳田國男との出会いの場面に持ち込もうとしたのか、あるいは、持ち込まざるをえなかったのか、その際の胸底や心底の方が、はるかに気に掛かる。ともかく、この年(一九一〇年)の夏、折口信夫は国学院大学を卒業し、東京を離れ、大阪へと帰郷することになる。そして、はじめて彼が「釋道空」を名乗り、出版されたばかりの石川啄木の歌集(『一握の砂』)を貪り読んだのも、この同じ年の出来事であった。

## 七 雑誌について

さて、これまで本稿では主として、折口信夫を縦糸にして、私たちの国が明治から大正へと「元号」を切り替える頃、言い換えれば、ヨーロッパでは「世紀末」や「ベル・エポック」という名で呼ばれる、十九世紀から二十世紀への転換期が訪れ、それが徐々に、いわゆる「第一次世界大戦」の大惨事(カタストロフィー)へと、音を立てて雪崩れ込んでいく頃——要するに、それが私たちの国に「教養」という語が姿を現し、それが多くの日本人の、とりわけ若者

の心を捉え、奪っていった時期に他ならなかったことを、振り返ってきた。振り返り切れなかった点は、幾つも残ってはいるが、少なくとも折口信夫の生涯や生活が、この時期を転機(ターニング・ポイント)として、大きく変化を遂げていったことは、ご理解を頂けたのではなからうか。

例えば、先刻、名を挙げた『一握の砂』の歌人、石川啄木は明治十九年(一八八六年)に岩手の盛岡で生まれているから、その生年は折口信夫と一年違いであるし、その同年には吉井勇や木下利玄が、その前年には北原白秋や若山牧水が、それぞれ産声を上げていることを思い起こせば、この時期に生を承けた歌人たちによつて、私たちの国の短歌——すなわち、近代和歌の歴史が大きく様変わりを遂げたことは、一目瞭然であろう。また、そこに若干、幅を持たせれば、例えば萩原朔太郎も谷崎潤一郎も、あるいは松井須磨子も長沼(後の高村)智恵子も、山田耕筰も中山晋平も、その全員が、この同年か翌年の生まれであるし、ご要望とあれば、そこに哲学者の高橋里美や落合太郎の名を付け加えることも、ほとんど場違いではあるまい。

そして、このような多様な領域で、陳腐な物言いで恐縮ではあるが、私たちの国に文化の花が一斉に開き、そこに「教養」の語が姿を現すためには、この時代を特徴づける都市文化と、その都市文化を都市のみならず——と言うよりも、より適切な言い方をすれば「都会」のみならず、むしろ農村や漁村や山村という名で呼ばれる、いわゆる地域や地方へと送り出し、それを憧憬の対象として祭り上げる媒体(メディア)——すなわち、新聞や雑誌や、いささか遅れて、映画(当時は「活動写真」)やラジオ(当時は「ラヂオ」という大衆媒体(マス・メディア)が出揃うことが条件であり、また、そのような媒体に操られ、多くの故郷喪失者たち、正確に言えば、結果的に故郷喪失者とならざるをえない者たちの産み出されることが、その前提である。

試みに、これまで本稿で取り上げてきた人物群の中から、その主だった顔ぶ

れを拾い上げるだけでも、例えば三木清にしても折口信夫にしても、三矢重松にしても阿部次郎にしても、藤村操にしても柳田國男にしても、高木敏雄にしても新渡戸稲造にしても、ことごとく彼らが地方出身者であり、その結果、最終的には故郷喪失者となり、いわゆる根無し草(デラシネ)の生涯を送らざるをえなかったことは、強調するまでもない。そのことを、ことさらに不幸であるとか、幸福であるとか、二分割することには何の意味も無いが、少なくとも彼らの大半が、当時、例えば文部省唱歌の「故郷(ふるさと)」を耳にして、これに無感動であったとは思えない。なお、この「故郷」も、一九一四年(大正三年)の『尋常小学唱歌』が初出である。(※)

(※) 引用は『日本歌唱集——日本の詩歌・別巻』(一九七四年、中央公論社)によるが、あえて新仮名遣いは旧仮名遣いに改めた。なお、この「故郷」の作詞者(高野辰之)も作曲者(岡野貞一)も、いずれも地方出身者であり、故郷喪失者である。この点については、ふたたび磯田光一『鹿鳴館の系譜』から、以下の一節を引いておく。「故郷で「こころざし」をはたせるくらいなら、まだしも話は簡単であった。「山はあをき故郷」が「こころざし」をはたす場所ではないと感じられたから、人びとは「こころざし」をい দিয়ে故郷をすてたのであり、「故郷へ錦を飾る」ことが、故郷の否定を媒介とせざるを得ないというディレンマを、近代日本は最初から背負わされていたのである。この宿命的なディレンマに目をつぶって、近代日本を語るができるであろうか。〔小学唱歌〕考——その一

世紀の帰趨)

兎追ひし かの山 小鮒釣りし かの川  
 夢は今も めぐりて 忘れがたき 故郷  
 如何にいます 父母 恙なしや 友がき  
 雨に風に つけても 思ひいづる 故郷

こころざしを はたして いつの日にか 帰らん

山は あをき故郷 水は清き 故郷

閑話休題。本稿では、このような都市化や大衆化や、ひいては戦争や恐慌や災害によって特徴づけられる時代に、新しく生まれた媒体、文字通りの新媒体(ニュー・メディア)として、とりわけ雑誌を取り上げ、柳田國男の主宰した『郷土研究』や、折口信夫の主宰した『土俗と伝説』を、引き合いに出しながら論を進めてきたが、ここで簡単に私たちの国の雑誌、ひいては雑誌文化のことを振り返っておくと、もともと雑誌という語は漢語であり、すでに私たちの国でも江戸時代から、例えば滝沢馬琴の『燕石雑誌』(一八一一年)等、随筆の書名として用いられてきたが、これが英語のマガジン(magazine)の翻訳語となり、現在の用法を手に入れるのは、どうやら一八六七年(慶応三年)刊行の『西洋雑誌』以降のようである。(※)

(※) 『日本国語大辞典』(小学館)を繙くと、そこには『西洋雑誌』の「伏啓」(此雑誌出版の意は、西洋諸国月々出版マガゼイン(新聞紙の類)の如く、広く天下の奇説を集めて、耳目を新にせんが為なれば……)が引かれ、これが『西洋雑誌』の発行人、柳河春三の翻訳語であったことが指摘されている。なお、この柳河春三は同時に、日本で最初の邦字新聞『中外新聞』の発行人でもあり、一八三二年(天保三年)に名古屋で生まれ、一八六四年(元治元年)には開成所の教授となり、さらに、その四年後(一八六八年)には主任(頭取)の地位にまで上り詰めているが、残念ながら、それから二年後(一八七〇年)に肺結核となり、三十九歳の若さで急逝している。

以降、この雑誌という翻訳語は日本語の中に定着し、すでに『西洋雑誌』の廃刊の五年後(一八七四年)には、日本で最初の、いわゆる総合雑誌である『明

六雑誌』が創刊されている。そして、それを継承しつつ、このような総合雑誌という形を取りながら、私たちの国に特有の雑誌文化は花を開くことになる。

ご参考までに、その主だったものを、中心人物と共に拾い上げておくと、例えば『明六雑誌』と同年には福澤諭吉の『民間雑誌』が創刊されているし、さらに一八七六年（明治九年）には中村正直の『同人社文学雑誌』が、また、それ以降は一年刻みで、例えば野村文夫の『団団珍聞』、守田宝丹の『芳譚雑誌』、田口卯吉の『東京経済雑誌』、小崎弘道の『六合雑誌』、杉浦重剛の『東洋学芸雑誌』、中江兆民の『政理叢談』と続く。

そして、その後に聳えているのが私たちの国の、まさしく雑誌文化の第一の頂（ピーク）であり、例えば一八八五年（明治十八年）の『女学雑誌』や、その二年後（一八八七年）の『国民之友』が、その代表格となる。ちなみに、この内の前者が八年後（一八九三年）に、その名を『文学界』と改めることも、また、この内の後者と同年に、もともと宗教雑誌として創刊された『反省会雑誌』（一八九二年以降は『反省雑誌』）が、やがて十二年後（一八九九年）には『中央公論』と名を改めることも、忘れられてはならないし、そのような『反省会雑誌』の創刊と同年（一八八七年）には、私たちの国で最古の——それどころか、世界でも最古の「哲学会」が、その機関誌として『哲学会雑誌』を創刊したことも、記憶に留められて然るべきであろう。

## 八 「八百屋哲学会」について

この「哲学会」の創設は、一八八四年（明治十七年）にまで遡るから、やがて二年後には帝国大学と名を改める、その直前の東京大学で生まれたことになり、英語名には『The Society of Philosophy』が宛がわれている。したがって、この「哲学会」の機関誌として『哲学会雑誌』が創刊されるのも、ちょうど東

京大学が帝国大学に名を改めた、その翌年のことになる。もともと、この『哲学会雑誌』の創刊号に以下の巻頭言を書いた、当時の会長の加藤弘之は、この三年後（一八九〇年）には自分自身が、その帝国大学の総長に就任し、まさしく「官学アカデミズムの育ての親」となるにも拘らず、（※）この巻頭言に限って言えば、その物言いは官僚臭が漂っておらず、むしろ激動の時代を生き抜いた、武士の末裔であったことが偲ばれうる。

（※）引用は大久保利謙『明六社』（二〇〇七年、講談社）の第三部（関連論文「明六社の人々」）による。加藤弘之は、一八三六年（天保七年）に兵庫の豊岡（当時但馬国出石藩）で生まれており、いまだ徳川家斉が將軍職に就き、いわゆる「文化・文政時代」が続いていた頃に、その生を承けたことになる。ただし、この年は「天保の飢饉」の被害が著しく、東北だけでも死者の数は十万人に達したとき、この翌年には「大塩平八郎の乱」も起きている。また、彼が十七歳で江戸に出た翌年（一八五三年）には、ちょうどペリーが浦賀に来航し、日本の開国を強要する事態も生じている。要するに、彼が少年期から青年期を過ごすのは、このような江戸時代の終焉と、幕藩体制の解体の時代であり、そこから彼の「進むべき道」も「発見」されることになる（大久保利謙）。なお、この巻頭言は「哲学会」（東京大学哲学研究室内）の公式サイトに掲載されている。

然ルニ我邦ニ至リテハ前述ノ如ク今般始メテ一個ノ哲学雑誌ヲ発行スルヲ得ルニ至リタル程ノ幼稚ナル状態ナレバ、各派其学会ヲ設立シテ相ヒ競争スル如キハ固ヨリ思ヒモ寄ラヌ事ト云ハザルベカラズ。是ヲ以テ今日ニ於テハ印度哲学者モ支那哲学者モ西洋哲学者モ皆相合シテ此一哲学会ヲ組成シテ、其中ニ於テ互ニ相研究スルヲ以テ足レリトセザルヲ得ザルナリ。所謂猫モ杓子モ共ニ合同セル哲学会ニシテ、恰カモ八百屋哲学会ノ名ヲ下シテ可ナラント思ハルル程ノモノナリ。是レ今日ノ我邦ニ於テハ已ムヲ得ザルノ事ニシ

テ、各派学会ノ競争ノ如キハ猶之ヲ数十午ノ進歩ノ時二期セザルヲ得ザルナリ。(傍点・引用者)

この巻頭言は「本会雑誌ノ発刊ヲ祝シ併セテ會員諸君ニ質ス」と題されているが、そこには当時の「哲学会」——と言うよりも、いまだ私たちの国に生まれて間もない、いわゆる学会の性格が窺われ、興味深い点が多い。例えば、この「哲学会」の会長を務めていたのが先刻の、いわゆる政治学者の加藤弘之であれば、副会長を務めていたのは、いわゆる文学者であり、日本で最初の社会学者でもあれば、教育学者でもあった外山正一であり、そこに『明六雑誌』の同人でもあった、西周と西村茂樹が加わった上に、いまだ当時は東京大学や帝国大学の大学生であった、井上哲次郎や井上圓了や、あるいは雪嶺こと三宅雄二郎や有賀長雄が顔を並べているのであるから、その陣容は単に、狭い意味における「哲学」の範囲を、はるかに超えている。

ちなみに、この顔ぶれの中の最年長者には、いわゆる倫理学者の西村茂樹が該当し、彼は一八二八年（文政十一年）の江戸生まれであるが、その出身は千葉（当時は下総国佐野藩）である。そして、これに続くのは翌年、島根の津和野（当時は石見国津和野藩）で生まれた西周であるから、彼らは当時、すでに五十歳代の後半に達しており、これに四十歳代の後半の加藤弘之と、三十歳代の後半の外山正一を加えれば、彼らは江戸から明治への転換期を、二十歳から四十歳の、まさしく成人として経験した世代になる。その意味において、このような彼らの悪戦苦闘と、端的に言えば、その中から産み出された翻訳語を通じて、私たちの国の「哲学」も「科学」も「芸術」も、ひいては「教養」も、その第一歩を踏み出したことになる。(※)

(※) このような翻訳語と、私たちの国の近代化の過程については、さしあたり柳文章『翻訳語成立事情』（一九八二年、岩波書店）と、丸山真男・加藤周一『翻訳と

日本の近代』（一九九八年、岩波書店）が道案内となるが、例えば「哲学」という翻訳語の成立については、齋藤毅『明治のことば』（一九七七年、講談社）が、その造語主である西周については、清水多吉『西周』（二〇一〇年、ミネルヴァ書房）が、それぞれ参考になる。

すでに述べたように、私たちの国に「教養」の語が姿を現し、それが現在の日本語の用法と、それほど違わない意味を獲得するのは、おおよそ一九一〇年代のことであり、それが私たちの国の年号で言えば、ちょうど明治から大正への転換期に当たる点、また、そこに幾分の幅を持たせれば、いわゆる「日露戦争」から「第一次世界大戦」への、文字通りの戦間期の落とし子が「教養」でもあった点、これらの点と並んで、その「教養」がヨーロッパ諸語の翻訳語として生まれ、英語のカルチャー (culture) であれ、フランス語のキュルチャー (culture) であれ、ドイツ語のビルドゥング (Bildung) であれ、いずれにしても一八八〇年代以降の、このような学会の俄（にわか）需要を下敷きにするものであった点は、忘れられてはならない。

実際、このような翻訳語と、その翻訳語による学問の輸入——それは、英語の importation と introduction を、そのまま、たまたま、にしたような行為であらざるをえなかったが、この時、そのような難局に立ち向かった世代、すなわち、江戸から明治への転換期を二十歳代の、すでに一人の人間として、人格形成を終えた段階で迎え、言ってみれば、それを大人（おとな）として経験した世代から、今度は明治の到来を十歳代か、それ以下の年齢、要するに、それを子供として経験した世代へとバトン・タッチが為され、この行為自体も引き継がれることになる。例えば、前掲の井上哲次郎や有賀長雄を中心にして、私たちの国で最初の哲学辞典（『哲学字彙』）が、早くも一八八一年（明治十四年）の時点で出版されているのは、その代表的な例である。



あるいは、そのようなバトン・タッチという点で振り返れば、例えば西周が英語の aesthetics やドイツ語の Aesthetik に、もともと「佳趣論」(一八七〇年『百学連環』)や「善美学」(一八七四年『百一新論』)や、あるいは「美学」(一八七九年『美妙学説』)という訳語を宛がったのに対して、これに「審美学」という訳語を与え、そこから現在の「美学」への道を切り開いたのは、この語の生みの親という点で言えば、兆民こと中江篤介の『維氏美学』(一八八三年)の名を挙げざるをえないが、そこに育ての親として位置付けられるべきは、やはり西周の従甥に当たる、鷗外こと森田太郎であり、このような親族間の、血縁的な系譜を繙くことによって、私たちの国の「学問」や「芸術」の歴史は、累々として跡付けられうる。

なお、森鷗外は西周と同様、島根の津和野の出身であり、生まれは一八六二年(文久二年)であるから、例えば前掲の「哲学会」の顔ぶれと比べると、三宅雪嶺や有賀長雄の二歳年少になる。その意味において、ここで途方もない無物強請(ないものねだり)をしておく、彼が当時、日本国内にいたのであれば、この「哲学会」の創設に際して、また、その機関誌(『哲学会雑誌』)の創刊に際して、どのような関与をしたのであろうか、という想像が沸き起こってくる。困ったことに、この想像にとつては遺憾ながら、彼は一八八一年(明治十四年)に弱冠、十九歳で東京大学の医学部を卒業し、陸軍省に入り、東京陸軍病院に勤務した後、一八八四年——すなわち、この「哲学会」の創設と同年来、ドイツへの留学の途に就いてしまうのであるが……。

## 九 「幼稚ナル状態」について

このようにして振り返ると、この頃の私たちの国では「哲学」が、いまだ本来の「希哲学」(西周)の語義を失うことなく、例えば文学は無論のこと、政治

学とも社会学とも、教育学とも倫理学とも、宗教学とも法律学とも、ほとんど不可分の状態で繋がりが合い、絡まり合っていたことが窺われうる。もちろん、そのような「幼稚ナル状態」を手放して賛美し、評価するには、それ相應の危険も伴われざるをえないが、少なくとも彼らが幸福な、未分化の揺籃期において「哲学」と関わり合うことができた点は確実であり、そうであるからこそ、例えば加藤弘之も先刻の引用に引き続き、この『哲学会雑誌』の巻頭言に以下の文言を連ね、この巻頭言を「本会雑誌ノ発刊ヲ祝シ併セテ會員諸君ニ質ス」と題するに至ったはずである。

哲学会ノ幼稚ナル状態ハ前述ノ如シト雖モ、然レドモ、苟モ哲学ニ志ス者ハ、  
哲理ノ進歩發達ヲ以テ其本旨トスベキハ固ヨリ論ヲ俟タズ。故ニ印度若クハ  
支那ノ哲学ヲ奉ズル人々ノ如キモ、必ズシモ釈迦孔孟ヲ以テ万世不朽ノ本尊  
ト崇ムルノ意念ヲ抱ク事ナク、只管真理ノ在ル所ヲ探討尋究スル事ヲ以テ  
其志トセザルベカラズ。即チ真理是レ本尊トスルノ心ナカルベカラザルナリ。  
然レドモ又西洋諸派ノ哲学ヲ修ムル人々ノ如キモ、強チ釈迦孔孟ノ主義ヲ以  
テ陳腐ノ空論トナサズ、其中猶真理ノ存スルモノアラバ好テ之ヲ採択スルノ  
念慮ナカルベカラザルハ勿論ナリ。然ラザレバ是亦西洋主義ヲ以テ本尊トナ  
スモノナレバナリ。是レ皆真理ヲ探究スルノ道ニ反シ、哲学ノ本意ニ戻  
ルモノト云フベキナリ。先ツ本尊ヲ立テ而シテ之ニ頼リテ真理ヲ求ムルガ如  
キハ、是レ即チ宗教ニシテ決シテ哲学ニアラザルナリ。本会ハ宗教ニアラ  
ズ全ク哲学会ナレバ、本尊是レ真理タリトノ妄念ヲ棄テ、真理是レ本尊タリ  
トノ主義ヲ取ルコソ当然ナルベシト余ハ思考スルナリ。今本誌ノ発刊ニ際シ  
聊カ卑見ヲ述べテ會員諸君ニ質ス。(傍点・引用者)

ところで、このような「幼稚ナル状態」は単に、独り「哲学会」に限られた

話ではなく、その跡を追うようにして、例えば五年後(一八八九年)には帝国大学に「史学会」が創設され、その機関誌(『史学会雑誌』)も創刊されるに至っている。が、この「史学会」の創設に奔走し、その尽力において、この「史学会」の立役者と評しても構わないのは、いわゆる「お雇い外国人」のルートヴィヒ・リースであったが、彼の骨折りに拘らず、この「史学会」の内実は「西洋史学会」へと、その傾斜を強めざるをえず、やがて一九一〇年(明治四十三年)以降、リースの帰国から十年を経ずして、私たちの国の「史学」は結果的に、いわゆる西洋史と東洋史と日本史(当時の呼称は、国史)の三領域へと、それぞれ分断されることになる。(※)

(※) ルートヴィヒ・リース(Ludwig Riess)は、一八六一年にポーランド(当時のプロイセン)で生まれた、ドイツ系ユダヤ人であり、ベルリン大学でランケの薫陶を受けた後、一八八七年(明治二十年)に来日し、帝国大学と名を改めたばかりの東京大学で「史学」の講義を担当している。その意味において、この時点から私たちの国の「西洋史学」は存在したことになる。以降、一九〇二年(明治三十五年)に帰国するまでの十五年間——彼の年齢に即して言えば、二十六歳から四十一歳までの青年期から壮年期を日本で過ごし、ヨーロッパの近代的な歴史学を私たちの国に移植すると共に、例えば村上直次郎や辻善之助や、幸田露伴の弟の幸田成友を育て、私たちの国の「日本史学」の礎を築いた人物でもある。リース自身は、帰国後も母校のベルリン大学で教鞭を取り続け、一九二八年(昭和三年)に六十七歳で亡くなっている。

このような状況は、等しく「美術」や「音楽」にも当て嵌まり、例えば一八八七年(明治二十年)に創設された、東京美術学校(後の東京芸術大学美術学部)と東京音楽学校(後の東京芸術大学音楽学部)においても、その創設の原動力となったのは、前者がフェノロサと岡倉天心の、後者がメーソンと伊澤修

二の、それぞれ師弟関係であった。(※)ただし、この師弟関係の間には年齢的に、かなり明瞭な差異が存在する上に、この双方が目指した、そもそも何を「美術」や「音楽」の名に値するものとするのか、という志向性において、まったく方向を離れた考え方が存在しており、それが結果的に、このような「美術」や「音楽」に根差した教育、いわゆる情操教育という名の教養教育に対しても、かなり異質な影響を、私たちの国に及ぼすことになる。

(※) この場では、この四人の経歴と、その業績を紹介するに留めるが、最年長はルーサー・ホイテイング・メーソン(Luther Whiting Mason)であり、彼はアメリカ最東北部のメーン州で、一八一八年(文化十五年)に生まれ、一八九六年(明治二十九年)に亡くなっている。日本には、アメリカ留学中の伊澤修二の指導教員であったことが機縁となり、一八八〇年(明治十三年)から一八八二年(明治十五年)まで、彼自身の年齢に即して言えば、六十二歳から六十四歳まで、滞在中、私たちの国の音楽教育——すなわち、西洋音楽教育の礎を築いた人物として知られている。一方、その弟子の伊澤修二は、一八五一年(嘉永四年)に長野の伊那(当時は信濃国高遠藩)で、下級藩士の家に生まれ、大学南校を卒業後、文部省に入り、三年間に及ぶアメリカ留学を経て、一八七九年(明治十二年)から東京師範学校の校長となり、同時に文部省の音楽取調掛の任に就き、恩師のメーソンを日本へと招くことになる。これに対して、最年少は天心こと岡倉覺三であり、彼は一八六二年(文久二年)、これまた福井藩の下級藩士の家に生まれているが、その生地が横浜であり、英語に堪能であったことから、やがて東京大学を卒業後、アーネスト・フランシスコ・フェノロサ(Ernest Francisco Fenollosa)の助手となり、東京美術学校の創設を始めとして、私たちの国の美術教育——すなわち、日本美術教育の礎を築いた人物として知られている。フェノロサの方は一八七八年(明治十一年)、いまだ二十五歳の若さで来日し、創設当初の東京大学で、哲学や政治学や経済学(当時の呼び方で言えば、理財学)の講義を担当し

たが、一八九〇年（明治二十三年）の帰国後は、ボストン美術館に勤務し、日本美術の紹介に尽力することになる。そして、そのボストン美術館で後年（一九一〇年）、同じ職に就くのが岡倉天心でもあった。

なお、このような芸術（アート）の一領域として、さらに「文学」という日本語の成り立ちを付け加えておくと、ここでも一八八六年（明治十九年）の「帝国大学令」と、それに付随して行なわれた、文学部の改組の影響は甚大であった、それが一年後には「英吉利文学科」と「独逸文学科」を、三年後には「仏蘭西文学科」を産み出し、そこに個々の、別々の「文学」が姿を現す一方で、やがて「帝国文学会」が創設され、その機関誌（『帝国文学』）も創刊されることになる。もともと、この「帝国文学会」を組織していたのが、前掲の井上哲次郎や、いわゆる言語学者の上田萬年であったことを想い起こせば、それは彼らの唱える「文学」が、いまだ科学——すなわち個別科学には、結果的に吸収し尽くされていなかった証拠でもあったろうが。

彼らを、単に哲学や言語学（当時の呼び方で言えば、博言学）の枠の中に収めることは、彼らの業績の質——決して、量には還元できない質の次元に、おそらく目を閉ざすことになるであろうし、そもそも哲学（philosophy）や言語学（philology）の語義にも、その精神にも、反することにもなるであろう。また、このような彼らの系譜を引き継ぎ、明治の初年に生を承け、いまだ当時は二十歳に達したばかりの大学生でありながら、この『帝国文学』の編集を担当し始める、樗牛こと高山林次郎、晚翠こと土井林吉、嘲風こと姉崎正治、柳村こと上田敏——このような面々にも、同様の指摘が可能である。彼らにしても、例えば美学者や文学者や宗教学者という肩書によって、その業績の質が理解されるとは、とうてい信じ難い存在である。

## 十 ふたたび……について

そもそも『帝国文学』は、帝国大学（一八九七年以降は、東京帝国大学）の「帝国文学会」を母胎にして、一八九五年（明治二十八年）から一九二〇年（大正九年）まで、四半世紀余りに亘って、産み出され続けた雑誌であるが、その四半世紀は大きく三期に分かれ、第一期が一八九五年から一九〇五年（明治三十八年）までの十一年間、第二期が翌年（一九〇六年）から一九一七年（大正六年）の初頭までの、これまた十一年間、そして、それから半年余りの休刊を挟んで、第三期が一九一七年（十月）から一九二〇年（一月）までの、わずか二年余り、という内訳になる。したがって、例えば本稿の冒頭で折口信夫が槍玉に上げた『帝国文学』とは、この内の第三期に当たり、この雑誌の使命も、ほぼ尽きようとしていた頃の話である。

そのような『帝国文学』と、創刊から数えれば百二十年近くを、廃刊から数えれば九十年余りを隔てた、今の私たちとの間に接点があるとすれば、それは私たちが『帝国文学』という、この一見、権威すくめの雑誌の中に、例えば漱石こと夏目金之助の『倫敦塔』（一九〇五年）や『趣味の遺伝』（一九〇六年）を、あるいは芥川龍之介の『羅生門』（一九一五年）を、その初出の場として発見した時ではあるまいか。それとも、これまた夏目漱石が『坊っちゃん』（一九〇六年）の中で、この『帝国文学』を「真赤な雑誌」と揶揄し、その愛読者に「赤シヤツ」を見立てている時の爽快感を、ふと想い起こした時ではなからうか。——「山嵐に聞いてみたら、赤シヤツの片仮名はみんなあの雑誌から出るんださうだ。帝国文学も罪な雑誌だ。」（※）

（※）以下、夏目漱石からの引用は、原則的に『漱石全集』（全十七巻、岩波書店）によるが、ここでも遺憾ながら、漢字表記については旧字体を改め、新字体に直した。

夏目漱石が『帝国文学』と関わりを持った時期は、彼が二年半近くのイギリス留学から帰国し、強度の神経衰弱を患ったまま、一九〇三年(明治三十六年)の春、第一高等学校の講師となり、それと並んで、東京帝国大学の講師となつてから、結果的に一九〇七年(明治四十年)の春、この双方の職を辞し、朝日新聞社に入社するまでの四年間であり、その点で振り返れば、すでに『坊っちゃん』を執筆していた頃の夏目漱石は、かなり『帝国文学』との間に疎遠感や、裏を返せば、疎外感を抱いていた時期であろうから、先刻の『帝国文学』への言及も、それ相応の含みはあったであろう。なお、夏目漱石が最初に『帝国文学』に文章を掲載するのは、一九〇四年(明治三十七年)の年頭であり、その表題は『マクベスの幽霊に就て』であった。

溯れば、そもそも『帝国文学』が創刊された年(一八九五年)に、夏目漱石は突然、不可解な「都落ち」をして、それから一年間、愛媛の松山に赴き、尋常中学校の英語教師として過ごした後、今度は翌年(一八九六年)の春から四年余りの間、第五高等学校の教授となり、熊本で暮らすことになるのであるから、基本的に彼が『帝国文学』と関わりを持った機会は、それこそ『坊っちゃん』の「赤シヤツ」のような、一地方の一読者に過ぎなかったと言え、言える。そして、それから二年半近くをロンドンで、夏目漱石は孤独と焦燥の中、悲惨な留学生生活を送り、強度の神経衰弱まで思い、ほとんど強制的に帰国の途に就くことになるのであるから、この段階での彼は、まったく『帝国文学』と没交渉であったと考えて、差し支えはあるまい。

しかし、仮に夏目漱石が「都落ち」をすることなく、そのまま東京で高等師範学校(一九〇二年以降は、東京高等師範学校)の講師をし、合わせて東京専門学校(一九〇二年以降は、早稲田大学)の講師を続けていたのであれば、彼と『帝国文学』との関わりは、まったく違ったものになっていたのではあるま

いか。夏目漱石が帝国大学に入学するのは、一八九〇年(明治二十三年)であり、これを卒業し、大学院に進学するのが一八九三年(明治二十六年)であるから、この時、すでに大学院生の身分で、彼は前年(一八九二年)以降の東京専門学校の講師と、この年の秋以降の、高等師範学校の講師を兼務していたことになる。そして、その翌々年(一八九五年)に起きたのが、繰り返すまでもなく、突然の「都落ち」であった。

このようにして振り返ると、はたして夏目漱石が帝国大学の内部に身を置きながら、まったく『帝国文学』と没交渉の道を選び取った可能性は、きわめて低い。事実、彼は大学生の頃、すでに帝国大学の「哲学会」の機関誌(『哲学会雑誌』)に、その最初の論文を発表しているが、すでに述べたように、この「哲学会」は「帝国文学会」に先立って、ちょうど十年前の一八八四年(明治十七年)に設立され、その機関誌も一八八七年(明治二十年)に創刊され、やがて五年後(一八九二年)には、その名を『哲学雑誌』と改めている。そして、その同年の十月、この『哲学雑誌』に掲載された、夏目漱石の処女作の表題は、またしても「文壇に於ける平等主義の代表者「ウォルト、ホイットマン」 Walt Whitmanの詩について」であった。(※)

(※) この「処女作」の前後にも、夏目漱石は帝国大学の大学生として、六月には東洋哲学の論文(『老子の哲学』)を、十二月には教育学の論文(『中学改良策』)を、それぞれ提出しているし、さらに翌年、彼が立て続けに『哲学雑誌』に論文(『英國詩人の天地山川に対する観念』)を掲載しているのは、彼が当時、この雑誌の編集員として、例えば藤代禎輔や松本文三郎、立花銃三郎や大島義脩と共に、その名を連ねていたからである。大学生であった頃の夏目漱石は、それ相応に筆運びは滑らかであった。

夏目漱石についての詮索は、この程度に留めるが、彼が生涯、このような形

で「……について」という表題の文章を書き続けたことは、それこそ『漱石全集』の随所に散見されうる。例えば、同全集（第十一巻）の「評論」の中には、一九〇九年（明治四十二年）の「コンラッドの描きたる自然に就て」（『国民新聞』）と「太陽雑誌募集名家投票に就て」（『太陽』）が、また、その翌年の「草平氏の論文に就て」（『東京朝日新聞』）が収められているし、さらに「序文」の中には、一九一二年（明治四十五年）の「池辺君の史論に就て」（池辺三山『明治維新三大政治家』再版序）と「土」に就て」（長塚節『土』序）が収められている。あるいは、これに「雑篇」の中から「学位問題に就いて」（一九一一年）を、付け加えることも許されるであろう。（※）

（※）同全集の第十六巻（別冊）には、下記の「談話」も収められている。念のために挙げておく。——「現時の小説及び文章に付て」（一九〇五年『神泉』）「近作小説二三に就て」（一九〇八年『新小説』）「俳諧師」に就て」（一九〇九年『東京毎日新聞』）「テニソンに就て」（一九〇九年『国民新聞』）

ちなみに、夏目漱石が亡くなるは、一九一六年（大正五年）のことであったから、もう暫くすると、彼の没後、百年を数えることになるが、その百年という時間の源には、例えば折口信夫が「郷土研究会」を創設し、そこから『土俗と伝説』の創刊に至ろうとする時期が重なり合ってくるし、それは本稿の冒頭で取り上げた、折口信夫の「毎月帖」の一節に立ち返ることもなれば、そこで彼が『帝国文学』を抜き下ろし、その「不徹底な語」の「煮えきらぬ事」を嘆いた事態とも通じ合う。（※）その脈絡で言えば、この「……について」という表題には、ちょうど二十年の歳月を隔てて生まれた、文字通りの「明治の青年」と「大正の青年」との間の、静かで激しい、個性（individuality）のぶつかりあい、が瞬いている、とも言えそうである。

（※）折口信夫が『帝国文学』の「購読」を開始するのは、すでに触れたように、中学

生の時分、十三歳の頃に遡る（『年譜』）。したがって、そのような彼が夏目漱石の、このような趣味や趣向や、その生き方（ライフ・スタイル）について、無関心であったり、無頓着であったりしたはずはなく、そこには漱石本人は言うまでもなく、いわゆる「漱石山房」に集い、後に「漱石山脈」と呼ばれる門下生たちへの——端的に言えば、羨望と侮蔑の入り混じった、好悪の感情が渦巻いていたに違いない。そして、それは私たちの国の「教養」の二文字が、その字面からして抱え込まざるをえない、人間関係の渦でもあった。